『センス・オブ・ワンダーを語る』 山極壽一、福岡伸一、中村桂子、畠山重篤/著 上遠恵子/編著 (かもがわ出版)

センス・オブ・ワンダーを話る 1886年 1988年 19

思カレ 「知識は間違える。気持ちを感じよう」前極等
しい ナイ 「紀はある意味、最大の報金です」 脳神・
とソチ 「紀はある意味、最大の報金です」 脳神・
を別している。 「最初に対象、最近前とでは、なるは、自由意覧 「いのちに能足を置いて考えてい」 上述 第三
「いのちに能足を置いて考えてい」 上述 第三

以前この欄でも紹介したことがある『センス・オブ・ワンダー』(レイチェル・カーソン著)が出版りまた、今年で60年になりまた。この間世界中の子どを教え、子どもたちに寄り添った。とれました。

今回紹介する『センス・オブ・ワンダーを 語る』の著者の皆さんは、子どもの頃のセン ス・オブ・ワンダーを今に至るまで持ち続 け、大きく開花させたかた達です。開いた花も、はじめに出会った「はてな?」によって、それぞれ違います。山極さんはゴリラの生き方、福岡さんは動的平衡からフェルメールまで、中村さんは生命誌、畠山さんは森は海の恋人など。でも、生命の不思議に魅せられて歩んでこられた原点はみなさん、「センス・オブ・ワンダー」だったということが良くわかります。

また、『センス・オブ・ワンダー』の翻訳者上 遠恵子さんとの対談も、普段は聞くことのでき ない秘話が披露され、楽しく読みました。

(小川)